

流離とみやび

——津の国の行平・業平兄弟——

大井田 晴彦

はじめに

『伊勢物語』の各章段において、舞台となるのは平安京に限らない。むしろ、都の外側に主人公の活躍の場が多く与えられていることに気づかされよう。大和（初段、二十三段など）や伊勢（六十九段など）など京の近辺のみならず、武蔵（九十三段）、陸奥（十四、十五、百十五、百十六段）、宇佐（六十段）、筑紫（六十一段）など東西の果てにまで及ぶ。都に安住すべき場を見出せぬ男は、まだ見ぬ地に憧れと怖れを抱きつつ、さすらいの旅を続けるのである。この物語では、地名（歌枕）はとりわけ重要な意味を有しているはずである。そもそも、初段からして平安京ならぬ大和の旧都を舞台としていた。「昔、男、初冠して、奈良の京、春日の里に、しるよしして狩にいにけり」と物語は語り起こされる。元服して貴族社会の一員となり、都の秩序に組み込まれたはずの青年は、それに抗うかのように奈良へと赴く。言うまでもなく、奈良とは業平の祖父平城上皇ゆかりの地であり、一族

流離とみやび（大井田）

の栄光と没落の記憶が深く刻みつけられた地である。かかる「ふるさと」を訪れ、自身の存在の原点を確認することで、男は新たな人生を踏み出すこととなる。この段で男が「女はらから」に贈った歌「春日野の若紫のすり衣しのぶの乱れ限り知られず」は、興味深い。すなわち、「春日野」↓「紫草の生える」武蔵野」↓「陸奥の」信夫」へと、次第に東に向かって遠離つてゆくベクトルを持った和歌であり、これが物語の始発に据えられた意味は重い。閉塞した都の日常から逃れて、まだ見ぬ世界へ足を踏み入れようとする、男の憧れを封じ込めた歌であり、後の東下りを予告するものといえよう。¹⁾

初段の「奈良の京、春日の里」によく似た位相にあるのが、五十八、八十四段の「長岡」である。いったんは新京の造営が行われたものの、それは中断し、長岡は廃都となった。そこには業平の母伊都内親王が住んでいたらしい。八十四段は、近づきつつある死を意識した母と、母の長寿を願う子の哀話であるが、平安京と長岡京とに別れ住んで母子が容易に会えない嘆きが語られる。

五十八段では、主人公が「長岡といふ所に家つくりて」住んでおり、「心つきて色好みなる男」らしからぬ稲刈りをしていたという。「その隣なりける宮ばらに、こともなき女ども」にからかわれた男は、家の奥に隠れてしまい、「葎生ひて荒れたる宿のうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり」と詠んで仕返しした。ユーモラスな一段であるが、女たちが、伊都内親王の姉妹の宮に仕える女房であることが注意される。一見すると無礼で手厳しい言葉の応酬ようであるが、両者の間にある、親族的な強い連帯感が、かかる風変わりなやりとりを可能にしているのである。母宮ゆかりの地で、気の置けない者同士が奇抜な言葉の戯れを楽しんでいるといった趣である。平城京も長岡京も、主人公の血縁にかかわる地であり、男は、都の生活の重圧を逃れて、自己を解放しようとする。都ではすっかり崩壊してしまった共同体が、長岡京ではかろうじて生き残っているともいえよう。

これらの例に見るように、『伊勢物語』では、その舞台となる地名を考えることが章段読解の重要な鍵となる。本稿では、地名や風景描写といった空間に関する表現から『伊勢物語』の特徴の一端を明らかにしたい。東下り章段については以前論じたこと²⁾があるので、摂津の周辺を中心に取り上げたい。

一

初段や六十九段などの主要な段をはじめ、主人公はしばしば狩を楽しんでいる。「狩」は『伊勢物語』の重要語の一つといえるが、似た言葉に「逍遙」がある。どちらも世俗の煩わしさから逃れ、美しい自然とふれあうことで、心身の自由を得、さらには人々の連帯を深めてゆくという点において共通している。

昔、男、親王たちの逍遙したまふ所にまうでて、龍田河のほとりにて、

182ちはやぶる神代も聞かず龍田河から紅に水くくるとは

(百六段)

男が親王たちと連れだつて、竜田河の紅葉を楽しんだという。『百人一首』にも撰ばれて著名なこの和歌は、波を立てて川を流れる色とりどりの紅葉を、鮮やかな紅の絞り染めに見立てた技法が一首の要である。また「ちはやぶる神代も知らず」とは大げさだが、それだけに今日の晴れの日をかけがえのないものとする機知が認められる。いかにも業平らしい大胆奇抜な着想と表現といえよう。『古今集』の詞書によれば「二条の後の東宮の御息所と申しける時に、御屏風に龍田川に紅葉流れたるかたをかけるを題にて詠める」とあり、本来は素性らとともに二条后高子の御前で詠んだ屏風歌であった。本段はきわめて短小な章段ではあるが、屏風歌から一篇の物語が生まれる機微を示す例として興味深い。

もう一例を挙げよう。

昔、男、逍遙しに、思ふどちかい連ねて、和泉の国へ、如月ばかりに行きけり。河内の国、生駒の山を見れば、曇りみ、晴れみ、立ち居る雲やまず。朝より曇りて、昼晴れたり。雪いと白う木の末に降りたり。それを見て、かの行く人の中に、ただ一人詠みける、

124 昨日今日雲の立ち舞ひかくろふは花の林を憂しとなりけり (六十七段)

気の合う仲間たちとの、せっかくの逍遙だったが、彼らの鬱屈した気持ち象徴するかのような、あいにくの曇り模様であった。梢に降りかかった雪は、あたかも白い花のようである。ようやくの晴れ間に、美しい梢の雪を発見した、その感動が込められた歌といえよう。男の歌は、昨日も今日も白雲が立ち上って山の姿を隠してしまうのは、雪が花かとも見まがう、そんな花の林を見られるのがいやだからなのだ、といった意である。「雪降れば冬こもりせる草も木も春に知られぬ花ぞ咲きける」(古今集・冬・三三三・紀貫之)、「雪降れば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし」(同・同・三三七・紀友則)などの常套的な表現によりつつも、擬人法を駆使することで機知的な面白みが生じている。「憂し」という、彼らの共有する心情を人ならぬ雲も有している、と詠むことで、座の雰囲気明るく和らげてもいいのである。

流離とみやび(天井田)

この段の前後の六十六、六十八段も「逍遙」の語こそないけれども、同様に逍遙章段と見なしてよい。

昔、男、津の国に、しる所ありけるに、兄弟友だちひきあて、難波の方に行きけり。渚を見れば、舟どもあるを見て、

123 難波津を今朝こそみつの浦ごとにこれやこの世をうみ渡る舟 (六十六段)

これをあはれがりて、人々帰りにけり。〔津の国にしる所ありける〕とは、初段「奈良の京、春日の里に、しるよしして」に類似した叙述である。実際、この周辺に在原氏の所領があったのであろう。「兄弟友だち」とある一行には、当然、兄行平も加わっていたはずである。歌は、難波津を今日こそ見たが、その御津ごとに行き来する舟、これこそこの世を憂きものと思つて渡つてゆく舟なのであったよ、くらしい意。「身のうれへはべりける時、津の国にまかりて住みはべりける」の詞書で『後撰集』雑三(一二四四)に載る(第二句「けふこそみつの」)。この世の憂悶を払うべく海岸に出たところ、はかなげに海を漂う舟を目にして、ますます憂愁が深められてしまった、というのである。人々も男と同じ不遇感を託っているだけに感動も深い。これらの段に共通するのが「憂し」という意識であり、次の六十八段にも引き継がれる。

昔、男、和泉の国へ行きけり。住吉の郡、住吉の里、住吉の浜を行くに、いと面白ければ、降りあつつ行く。ある人、「住

吉の浜と詠め」と言ふ。

125 雁鳴きてきくの花咲く秋はあれど春のうみべに住みよしの浜

と詠めりければ、みな人々詠まずなりにけり。(六十八段)

歌の「うみ」には「海」と「憂み」とが掛けられているものの、前の二章段とは異なり、明るい雰囲気にも包まれている。地の文の「住吉の郡」↓「住吉の里」↓「住吉の浜」という表現は、海岸を逍遥する人々の動きを辿りつつ、弾むような心地よさ、開放感を感じさせる。ここには、「すみよし」という縁起のよい言葉を繰り返すことで、禍を転じ、幸福を招き寄せようとする、言葉の呪力、あるいは土地ほめの意識が底流しているのではないか。「よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき人よく見」(万葉集・巻一・二七・天武天皇)にも通ずる表現である。歌は、やって来た雁の鳴き声を聞く、菊の花が咲く秋は結構だけれども、「憂し」といわれる春の海辺が、その名の通り住み良いのです、という意である。古来の春秋優劣争いの形式によりながら、前段までの憂愁の想いを払いのけて、逍遥を謳歌する楽しさへと転じた機知に、この歌の見事さがある。浜のうららかな春景色を称賛する、この歌は、住吉の神への讃歌ともなっているように。

昔、帝、住吉に行幸したまひけり、

198 我見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いくよ経ぬらむおほん神、現形したまひて、

199 むつましと君はしらなみ瑞垣の久しき世より祝ひ初めて
き (百十七段)

やはり住吉を舞台とするこの段は、神の詠歌を語る特異なものとなっている。「我見ても」の詠者を帝とする説もあるが、六十八段の延長線上にある段として、主人公の男が詠んだ歌と見ておきたい。神をも感動せしめる、男の歌の威力が示された一段である。

二

先述のように、六十六段の「難波津を」の歌は、若干の語句の違いはあるものの、「身のうれへはべりける時、津の国にまかりて住みはべりけるに」の詞書で、業平の作として『後撰集』(雑三)に収録されているが、詠歌事情にさしたる違いもない。

『古今集』の業平の東下りに関する記述を見れば明らかのように、勅撰集の詞書が必ずしも史実を伝えているとは限らない。しかしながら、いささかの虚構が含まれているにせよ、業平が摂津で沈淪の時期を過ごしたと考えても、特に差し支えない。次の段は、そのような不遇時代の話だろうか。

昔、男、津の国、菟原の郡に通ひける女、このたび行きては、または来じと思へるけしきなれば、男、

66 芦辺より満ち来る潮のいやましに君に心を思ひますかな

返し、

67こもり江に思ふ心をいかでかは舟さす棹のさして知るべき

田舎人の言にては、よしや、あしや。 (三十三段)

不遇の男性官人たちの交流を語ることの多い、撰津国章段において、男と土地の女の交渉を語る、やや異例な段である。男の帰京が決まったのだろうか、女は男の愛情の薄らぎを感じている。男は、そうした女の懸念を払拭しようとして歌を詠みかける。「芦辺より」の歌は、芦辺から満ちて来る潮のように、ますますあなたへの愛情がまさっていくことです、の意だが、「満ち来る」には、女のもとを忘れずに通つて来る、の含みがある。「芦辺より満ち来る潮のいやましに思へか君が忘れかねつる」(万葉集・巻四・六一七・山口女王)の異伝歌であり、古今六帖(第三)では末が「思ひはませど逢はぬ君かな」とある。女の返歌は、こもり江のように人知れず深く思っている私の心を、あなたがどうして舟を操る棹のように、はつきりとおわかりになれましょう、の意。ともに眼前の海岸風景に即した贈答歌である。「田舎人の言にては、よしや、あしや」は、「良しや悪しや」「芦や芦や」の掛詞による遊戯的な語り手の評言だが、田舎の女を軽んじつつも、予想外に見事な返歌をした女を評価してもいる。

男性たちの逍遙にせよ、土地の女との恋にせよ、撰津国章段には、東下り章段に共通する性格が認められよう。すなわち、不遇

流離とみやび(大井田)

意識を共有する男たちが都を離れ、明媚な風光を楽しむ、あるいは必ずしも和歌に通じていない鄙の女と贈答をする、かかる筋立ては、東下り章段にも繰り返し見られた。すなわち、東下りを空間的に反転させたのが撰津国章段といえよう。東下り章段と撰津国章段とを一对のものとして考えるべきである。須磨下向の史実から東下り章段が構想されたとも考えられよう。ともあれ、『伊勢物語』において、かかる章段が多く見られるのは、貴種流離の典型としての在原氏のイメージと深く関わる。周知のように、業子の変は、平城皇統に大きな打撃を与えた。事件に連座して、業平の父阿保親王は、大宰府へと流された。伯父高岳親王は、春宮を廃され、出家を遂げた。その後、インドへの求法の旅の途中、消息は途絶えてしまった。かくして、史実と伝承が交錯しつつ、流離する一族の物語が生成してゆくこととなる。

撰津国に沈淪、謫居していたのは業平だけではない。兄行平のほうも、いつそう撰津との関わりが深い印象がある。

田村の御時に、事にあたりて津の国の須磨といふ所にこもりはべりけるに、宮の内にはべりける人につかはしけるわくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶとこたへよ (古今集・雑下・九六二)

文徳天皇の御代に、行平が事件に関係して須磨に蟄居した時期があるのだという。これを裏付ける史料は見出せず、「事」の実態も不明である。直前に「思ひきや鄙の別れに衰へて海人の縄たき

漁りせむとは」という小野篁の歌が置かれているが、同様に、政治的な問題での蟄居謹慎であろうか。剛毅な性格が体制に疎まれ、須磨へ下ることになったのかも知れない。

この古今集歌を契機として、行平須磨沈淪の伝承が形成されてゆく。『源氏物語』「須磨」の一節をみよう。

渚に寄る波のかつ返るを見たまひて、「うらやましくも」とうち誦じたまへるさま、さる世の古事なれど、めづらしう聞きなされ、悲しとのみ、御供の人々思へり。うちかへりみたまへるに、来し方の山は霞はるかにて、まことに三千里の外の心地するに、權の雫もたへがたし。(中略)おはすべき所は、行平の中納言の藻塩たれつつわびける家居近きわたりなりけり。海づらはやや入りて、あはれにすごげなる山中なり。

(須磨・新編日本古典文学全集②一八七頁)

周知のように「須磨」は和歌や漢詩文の引用が多い巻であるが、右には行平・業平兄弟にまつわる故事が踏まえられている。「うらやましくも」は、東下り章段の発端、七段の「いとどしく過ぎ行く方の恋しきにうらやましくもかへる波かな」による。「おはすべき所は」以下では、行平の名と古今集歌を明示している。業平の東下りと行平の須磨蟄居が一对のものとして『源氏物語』に取り込まれていることが理解されよう。また、「權の雫」は、「我が上に露ぞ置くなる天の川門渡る舟の權の雫か」(五十九段)による。地の文には、「昔、男、京をいかが思ひけむ、東山に住ま

むと思ひ入りて」とあり、東下りと無関係ではない。

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけむ浦波、よるよるはげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものはかかる所の秋なり。(同・一九八―一九九頁)

ここでも行平の名が明示されるが、『続古今集』羈旅(八六八)に行平作として収める、右の歌を踏まえているという。

津の国の須磨といふ所にはべりける時、詠みはべりける旅人は袂涼しくなりにけり関吹き越ゆる須磨の浦風

他の文献には見えぬこの歌を、行平の真作と認めるかは躊躇されるところである。むしろ壬生忠見の「秋風の関吹き越ゆるたびごとし声うち添ふる須磨の浦波」(新古今集・雑中・一五九七)を引くとみる説もあるが、いずれにせよ『源氏物語』が当時流布していたであろう行平伝承を撰取していることは動くまい。やがて『撰集抄』巻八には、行平が須磨の海女と出逢う話が見えるようになり、さらに松風・村雨姉妹との交情、別離を語る謡曲「松風」へと展開してゆくのである。

三

ここで在原行平という人物の輪郭について簡潔になぞっておきたい。⁴⁾平城天皇の皇子、阿保親王を父として弘仁九年(八一八)

に配流先の大宰府にて誕生。「一つ子にさへありければ」(八十四段)の記述を信頼すれば、業平の異母兄となる。天長三年(八二六)、仲平・守平・業平の弟たちとともに在原姓を賜る。承和七年(八四〇)に藏人となり、以後、侍従、因幡守、播磨守、左兵衛督、備中守、左衛門督、大宰権帥などを経て、元慶六年(八八二)中納言、八年正三位兼民部卿に至り、寛平五年(八九三)薨去。娘の清和女御文字は貞数親王を出産するが、この時の一族の喜びは、七十九段の伝えるところである。また私学である奨学院を設立した。優れた政治的手腕を発揮し、「剛直な良吏型官人」とも評価される⁽⁵⁾。かかる硬骨の政治家という側面とともに、重要なのは文化人、歌人としての性格である。『古今集』真名序には、「風流は野宰相の如く、雅情は在納言の如し」という批評が見え、小野篁と並び称せられる。この評言のように、「春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそ乱るべらなれ」(古今集・春上・二三)は、きわめて官能的、耽美的な歌であり、優れた感性を感じさせる。「立ち別れいなばの山の峰に生ふるまつとし聞かばいま帰り来む」(古今集・離別・三六五)は因幡守赴任もしくは離任時の歌で、巻八の冒頭を飾る名歌である。また、自ら主催した、在民部卿歌合は最初期の歌合として注目される。かように『古今集』成立前夜、和歌が振興してゆく、その一翼を担った人物であり、当時の文化の最先端にいた、重要な存在であった。『後撰集』には、河原左大臣源融との親交も語られており(雑

流離とみやび(天井田)

一・一〇八二)、河原院の風流に集う一員であったことも知られる。理想的な「みやび」の体現者と評すことができよう。七歳年少の業平は、この兄の影響もあって和歌に親しみ、その才能を伸ばしていったのではなかったか。ちなみに「在原」姓は、『詩経』「常棣」による命名とされるが、この詩にうたわれるごとく、親しい兄弟であったと想像される。

体制に反抗的な、行平の剛毅な性格は以下の段にもうかがえる。

昔、左兵衛督なりける在原の行平といふありけり。その人の家に、よき酒ありと聞きて、上にありける左中弁藤原の良近といふをなむ、まらうどぎねにて、その日はあるじまうけしたりける。情けある人にて、瓶に花をさせり。その花の中に、あやしき藤の花ありけり。花のしなひ三尺六寸ばかりなむありける。それを題にて詠む。詠み果てがたに、あるじのはらからなる、あるじしたまふと聞きて来たりければ、とらへて詠ませける。もとより歌のことは知らざりければ、すまひけれど、しひて詠ませければ、かくなむ、

177 咲く花の下に隠るる人を多みありしにまさる藤の蔭かも「など、かくしも詠む」と言ひければ、「おほきおとどの栄華の盛りにみまそかりて、藤氏のことにも栄ゆるを思ひて詠める」となむ言ひける。皆人、そしらずなりにけり。(百一段)

行平邸で、藤原良近を招いて藤の宴が催された。「情けありて」

とあるのは、仮名序の「雅情」を彷彿させよう。ようやく宴も終わる頃になって、「あるじのはらから」、すなわち業平が姿を見せた。固辞する彼に人々は詠歌を強要する。「もとより歌のことは知らざりければ」という評言が意味深長である。「咲く花の」の歌が人々に奇異な感じを抱かせたのは、時流に乗る権門藤原氏に媚び諂う人々を揶揄したように聞こえるからである。しかし、咲き誇る藤花に藤氏のいつその繁栄を祈願した、と説明されては誰も非難できまい。和歌の力によって権力に揺さぶりをかけ、一矢を報いる、華麗にして強かな「みやび」の一面が示された段といえよう。行平は、この段ではさしたる活躍をしていないように見える。しかし、思わせぶりに宴に遅刻して、人々の度肝を抜くような歌を詠む、かような業平の振る舞いは、宴の主人である行平の演出によるのではないか。兄弟示し合わせてのパフォーマンスだったと想像されるのである。

昔、仁和の帝、芹河に行幸したまひける時、今はさること似げなく思ひけれど、もとつきにけることなれば、大鷹の鷹飼にてさぶらはせたまひける。摺り狩衣の袂に、書きつけける、

195 翁さび人などがめそ狩衣今日ばかりとぞたづも鳴くなる
おほやけの御けしき悪しかりけり。おのが齢を思ひけれど、若からぬ人は聞き負ひけりとや。

(百十四段)

本段には、大きな問題がある。光孝天皇の行幸は、「十四日戊午、芹川野に行幸し給ひき。(略)是の日、勅して参議已上に摺

布の衫と行騰とを著けしめ給ふ。(略)辰の一尅、野口に至り、鷹鶴を放ちて野禽を拂ひ撃ちき」(三代実録・仁和二年十二月十四日)とあり、史実を踏まえるが、この時、すでに業平は没している。そもそも、「翁さび」は、『後撰集』雑一(一〇七六)によれば、行平の作である。雑一卷頭(一〇七五)は、「仁和の帝、嵯峨の御時の例にて芹河に行幸したまひける日」の詞書で「嵯峨の山みゆきたえにし芹河の千代の古道あとはありけり」の行平詠があり、それに続いて当該歌が置かれている。これには「同じ日、鷹飼にて、狩衣の袂に鶴のかたを縫ひて、書きつけたりける」と詞書があり、さらに「御幸のまたの日なむ致仕の表たてまつりける」との左注が備わる。『伊勢物語』と『後撰集』では、まったく設定が異なっていることに気づかされる。すなわち『後撰集』では、行幸に随い、帝を称える歌を献じ、さらには致仕を目前にして、老いたる我が身を詠嘆する、という話になっているのに対し、『勢語』では、「翁さび」の歌が、やはり高年齢だった帝を揶揄するものと誤解され、不興を買った、という風に語られている。『勢語』の文脈に従う限り、男は、「おのが齢を思ひけれど」と抜け道を用意しながら、老いたる帝を笑いものにしているのであろう。やはり百一段と同じく、和歌の力で権力を挑発するのである。物語は事実反してまで、主人公に兄行平の歌を詠ませていることになるが、権力に果敢に立ち向かう、硬骨の人、行平のイメージを主人公に重ね合わせようとする意図がある

のではないか。本段では、兄弟が重なり合つて、行平でもあり業平でもあるような、より大きな一人の人格となつていっているように思われる。固有名詞を持たぬ「男」の物語であることが、これを可能にしたのである。

四

行平が登場する段で、最も長大なのが次の八十七段である。

昔、男、津の国、菟原の郡、芦屋の里に、しるよしして、行きて住みけり。昔の歌に、

157 芦の屋の灘の塩焼いとまなみ黄楊の小櫛もささず来にけり

と詠みけるぞ、この里を詠みける。ここをなむ、芦屋の灘とはいひける。この男、なま宮仕へしければ、それをたよりにて、衛府の佐ども集まり来にけり。この男のこのかみも、衛府の督なりけり。その家の前の海のほとりに遊び歩いて、「いざ、この山の上にあるといふ、布引の滝見に登らむ」と言ひて、登りて見るに、その滝、物よりことなり。長さ二十丈、広さ五丈ばかりなる石の面、白絹に岩を包めらむやうになむありける。さる滝の上に、円座の大ききして、さし出でたる石あり。その石の上に走りかかる水は、小柑子、栗の大ききにてこぼれ落つ。そこなる人に、皆、滝の歌詠ます。かの衛府の督、まづ詠む、

流離とみやび(天井田)

158 わが世をば今日か明日かと待つかひのなみだの滝といづれ高けむ
あるじ、次に詠む、

159 抜き乱る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖の狭きに

と詠めりければ、かたへの人、笑ふことにやありけむ、この歌にめでて、やみにけり。

帰り来る道遠くて、失せにし宮内卿もちよしが家の前来るに、日暮れぬ。宿りの方を見やれば、海人の漁りする火、多く見ゆるに、かのあるじの男詠む、

160 晴るる夜の星か河辺の螢かもわが住むかたの海人のたく火か

と詠みて、家に帰り来ぬ。

その夜、南の風吹きて、浪いと高し。つとめて、その家の女の子ども出でて、浮き海松の、浪に寄せられたる拾ひて、家の内に持て来ぬ。女がたより、その海松を、高杯に盛りて、柏をおほひて出だしたる、柏に書けり、

161 わたつ海のかざしにさすといはふ藻も君がためには惜しまざりけり

田舎人の言にては、よしや、あしや。

冒頭の「津の国、菟原の郡、芦屋の里に、しるよしして」とは、前掲の六十六段、さらには初段に類似の記述が見られた。また末

尾の語り手の評言「田舎人の歌にては、余れりや、足らずや」は、三十三段の「田舎人の言にては、よしや、あしや」とほぼ同じである。八十七段が核となつて、次第に一連の撰津国章段が形成されていったと推察される。「芦の屋の」は『古今六帖』に見える歌だが、『万葉集』の「志賀の海女は藻刈り塩焼きいとまなみ櫛笥の小櫛取りも見なくに」(巻三・二七八・石川少郎)の異伝である。古くから歌に詠まれた風光明媚な地として、主人公たちが集い歌を詠み交わす場にふさわしいことを示すものとして、この古歌が引かれるのである。

「なま宮仕へ」とは中途半端な、気乗りのしない宮仕えの意。この物語では、「宮仕へ」の退屈さ、味気なさが繰り返して語られる。「子は京に宮仕へしければ、(母宮ノ許へ)まうづとしけれど、しばしばえまうでず」(八十四段)、「おほやけの宮仕へしければ、(惟喬親王ノ許へ)常にはえまうでず」(八十五段)などと、親しい人々と主人公の仲を隔てるものとして否定的に語られてもいる。やはり同様の不満を抱いている者たちも少なくないのである。「衛府の督」である兄行平を筆頭に、「衛府の佐」たちが集い、布引の滝を見物に行くこととなった。

この段の核は、行平・業平兄弟の滝の歌にこそある。『古今集』雑下に載せる、次の二首(九二二〜九二三)との関連が注目される。

布引の滝にてよめる

在原行平朝臣

922 こきちらす滝の白玉拾ひおきて世の憂きときの涙にぞかる
布引の滝のもとにて、人々集まりて歌よみける時によめる
業平朝臣

923 抜き乱る人こそあるらし白玉の間なくも散るか袖の狭きに
この二首が同時に詠まれたのかは定かではない。それぞれ別個に詠まれたのかも知れない。

行平の歌は、あたり一面にまき散らす、滝の白玉を拾っておいて、世の中をつらく思った時に流す涙に借用することによつて、既に涙は涸れ尽きてしまったので、の意。業平の歌は、緒を抜いてばらばらにしてしまった人がいるらしい、滝の白玉が絶え間なく散ることだ、それを受け止める袖は狭いの、の意。二首ともに、滝の飛沫を美しい白玉に見立て、かつ身の不遇を嘆く点で共通している。

業平の歌は八十七段にも見えるが、行平は、これとは異なる歌を詠んだこととなっている。古今集歌は、滝の飛沫を美しい白玉に見立て、さらにそれを涙に見立てた、手の込んだ、かつ優美なもので、「春のきる」(春上・二三)の作者にふさわしい。「涙にぞかる」という発想も斬新である。にもかかわらず、あえて行平真作か定かでない「わが世をば」を採った物語の真意はどこにあるのだろうか。我が世を謳歌する日を今日か明日かと待つ、その「峡」ならぬ「甲斐」がなく、流す涙の滝と、この布引の滝とどちらが高かったのだろうか、という奇抜な発想は、誹諧歌に区

分されるべき性格のものである。「かたへの人、笑ふことにやありけむ、この歌にめでて、やみにけり」とあるように、かかる俳諧歌との対比によって、弟「あるじ」の歌が鮮やかに引き立てられる効果がある。

逍遙を終えての帰路、漁り火を見て主人公の詠んだ「晴るる夜のく」は、やはり見立てを駆使した歌であるが、美しく光り輝くという点において、布引の滝の白玉のイメージと連続してもいよう。

この段の特徴は、その詳細な風景描写にある。いったい、この物語は自然を描くことに関心がない、あるいは習熟していない。総じて平安前期の散文では、風景叙述の方法が確立していない。狩など野外を舞台とする段でも、自然描写は稀である。本段における、布引の滝や漁火の描写は、物語中きわめて異例である。そして、その細を穿った描写が、「石の面、白絹に岩を包めらむやう」「円座の大ききとして、さし出でたる石」「水は、小柑子、栗の大ききにて」「星か河辺の螢かも」などと、見立てを駆使した、比喩尽くしの描写となっている点に気づかされるのである。この段の表現について、白詩の大きな影響が認められるという説もある。⁽⁸⁾

『古今集』雑下では、先に引用した行平詠から、九首の滝を詠んだ歌が並ぶ。注意したいのは、滝を題材にした屏風歌がいくつも見えることである。

流離とみやび(天井田)

比叡の山なる音羽の滝を見てよめる 忠岑

928 落ちたぎつ滝の水上年つもり老いにけらしな黒きすぢなし

田村の御時に、女房の侍ひにて御屏風の絵御覧じけるに、「滝の落ちたりける所おもしろし。これを題にて歌

よめ」と、侍ふ人に仰せられければよめる 三条町

929 思ひせく心のうちの滝なれや落つとは聞けど音の聞こえぬ
忠岑の歌は、家集(八〇)の詞書によれば、「音羽の滝の白きゆゑを、後の宮の屏風の歌」とあり、本来は屏風歌だった可能性もある。「思ひせく」の作者、三条町とは、文徳更衣紀静子、名虎の娘、惟喬親王の母である。この歌は、最初期の屏風歌として注目される。

周知のように、屏風歌が物語文学に与えた影響は大きなものがある。もちろん、作者が布引の滝を描いた絵画を眺めながら物語を執筆したなどと言うのではない。絵画的な想像力を摂取しながら、風景叙述の文体を開拓していったことである。目にした風景をそのまま素描するのではなく、いったん絵画の枠組みを通して把握し直し、表現する、というのが当時の人々の自然との関わり方であった。ともあれ見立ての多用と絵画的想像力によって、彼らが脱俗的な風流を楽しむにふさわしい、日常の現実とは一線を画した、美的な文学空間が構築されているのである。

むすび

本稿では、主に摂津国を舞台とする、行平・業平兄弟関連章段を考察してきた。都に安住の場を得ない彼らは、時には須磨に、時には東国・陸奥へと流離した。彼らのさすらいは、祖父平城以来の、運命的なものでさえあった。不遇の名門に寄せる人々の同情と共感が、史実を取り込みながら一連の虚構、貴種流離譚を生み出していったのである。もちろん、彼らは、ただ不遇に沈潜したまま、世俗からの逃避に甘んじていたわけではない。その和歌の力によって、体制に厳しく対峙し、抵抗することもしばしばである。王族ならではの誇りと矜持がそうさせるのであろう。この兄弟は、誰にもまして、優れた「みやび」の体現者であった。「流離とみやび」と題したゆえんである。

注

- (1) 鈴木日出男『伊勢物語評解』(平成二五年、筑摩書房)参照。なお、『伊勢物語』の本文の引用も本書により、適宜表記を改めた。
- (2) 拙稿「伊勢物語・東下り章段についての試論」『名古屋大学文学部研究論集』文学五二(平成一八年三月)
- (3) 史実における在原行平については、目崎徳衛『平安文化史論』(昭和四三年、桜楓社)「在原業平の歌人的形成」、由良琢郎『伊勢物語人物考』藤原敏行と在原行平(昭和五七年、明治書院)参照。
- (4) 注(3)の目崎論文。

- (5) 福井貞助『伊勢物語生成論』(昭和四〇年、有精堂)「在原行平と伊勢物語の構造」
- (6) 仁平道明『和漢比較文学論考』(平成二二年、武蔵野書院)「賜姓在原朝臣」
- (7) 今井源衛『王朝物語の研究』(昭和四五年、角川書店)「伊勢物語」再び伊勢物語百一段について
- (8) 久保瑞代「在原行平・在原業平における白居易詩の受容」『古今集』布引の滝の歌をめぐって」『言語表現研究』一九(平成十五年三月)

キーワード…地名、摂津国、在原行平、流離、みやび

Abstract

流離とみやび
(大井田)

Wandering and *Miyabi*: *Ariwara brathers in Settu*

Haruhiko Oida

In *Isemonogatari*, the place names are very important. These of outside of *Heian-kyo* in particular. For example, in *Kasuga of Nara* where is related to *the Emperor Heizei* who is *Narihira's* grand father, this monogatari starts, and *Nagaoka-kyo* is related to *Princess Ito* who is *Narihira's* mother. The purpose of this report is to investigate essence of the episodes of *Ariwara-no-Yukihira* and *Narihira* in *Settu*. There is a misfortune of the image in the *Ariwara family*. Sympathy to their, gave birth to a wandering of the stories of noble persons. By the elegant Waka, *Ariwara brather* bravely stood up to the power not only lamented their misfortune. Their way of life was exactly *Miyabi*.

Keywords: place name (*Utamakura*), *Settu*, *Ariwara-no-Yukihira*, wandering, *Miyabi*